

本年度総括 さぬき・東かがわ社研

東かがわ市立三本松小学校 白澤 一修

研究主題

思考力の育成をめざした学習プランの開発
～子どもの問いをつくり、深め、広げる～

1 研究主題について

本部会は、「思考力・判断力・表現力の育成」という観点から社会科学習を見直す。その理由としては教材研究不足や社会科の授業のイメージができていないことが考えられ、教師主導の授業展開が多く行われていることからである。改善策としてサブテーマに「子どもの問いをつくり、深め、広げる」とし児童の問いを中心に単元構成を再考していくことを共通理解した。単元構成の始めに問いをつくり、途中で調べ学習を通して、問いを深めていく。問いを深めるとは知識及び技能を確実に習得することである。さらに終盤では、問いを調べて得た知識や技能、表現力を使い、社会に発信していくことを日常化し、思考力の育成等に取り組むこととした。

〈本年度の具体的な研究内容〉

- (1) 教材開発について（教科書・副教材活用）
- (2) 資料活用と児童の表現活動の関わり（社会参画の意識・思考が見えるノート作り等）
- (3) 思考力の育成と児童の表現活動の関わり（言語活動について）

2 研究の実践

- (1) 第1回研究会 6月12日 会場 さぬき市立長尾小学校

- ① 研究授業 4年 単元名「ごみの処理と利用」
授業者 さぬき市立長尾小学校 教諭 梅本 明宏

授業説明

学校行事のボランティア活動や生活体験を通して、ごみと向き合う姿勢を実感させ、ごみを少なくする大切さに気づかせたかった。また、実際に見学したクリーンセンターでの情報や分別作業には様々な人が協力していることを理解させ、環境保全が保たれている事実を認識させた。さらに「私たちに何ができるか。」という社会参画の意識を培うこともねらっていた。

研究討議（KJ法によるグループ討議）

ア（第1グループ）

体験学習として分別作業を行う場合には必要性のある問いが必要である。東部溶融炉は全部溶けるから分別しなくてもよい、という認識が生じる。しかし、分別したその先に循環型社会を見ることが出来る。他地域との比較がその手がかりになるのではないかな。

イ（第2グループ）

家庭での分別や聞き取りなどの体験をもう少ししておく切実な問いになったのではないかな。ごみ全体を減らすのか。リサイクルできるものを増やすのか。どちらが問いだったのか。

ウ（第3グループ）

交流で前時までの学習内容をつないで考えられていた。長尾地区のルールを十分に認識していればさらに深まったであろう。子どもたちは10年もしないうちに長尾地区を離れる子が多い。ルールを知って社会のルールに従って行動することを学ばせたい。

- ② 指導 さぬき市立長尾小学校 教頭 亀井 健男

ア 最近では、お店やスーパー、地域・自治会等で資源を回収する取り組みを行っている。これらは社会の様々な立場にある人や機関が自分たちに出来る取り組みをしている。これに気付けると社会参画の意

識につながる。みんなでごみを減らそうとしているのが分かる単元として教材研究ができていた。確実に家に帰ったら、ごみに対する意識が変わっている。

イ 思考・判断・表現という観点から次に必要とされている力が想像力と創造力である。今回の授業で言うところ、ごみを減らして循環型社会にするにはどうしたらいいのか。(想像力) そのためにはどういう世の中の仕組みを作っていけばいいのか。(創造力)

(2) 第2回研究会 7月25日 会場 東かがわ市立三本松小学校
香小研社会科部会夏季研修会での提案検討会

① 演習 単元名 「第4学年 ごみの処理と利用」

提案者 さぬき市立長尾小学校 教諭 梅本 明宏

② 内容

夏季研修会へ向けて提案内容を部員で検討する。梅本教諭の提案内容について共通理解を図り、分別作業のワークショップを行った。その後、協力者のワークショップにおける役割分担を確認。

(3) 第3回研究会 11月6日 会場 さぬき市立松尾小学校

① 研究授業 5年 単元名「わたしたちの生活と工業生産」

授業者 さぬき市立松尾小学校 教諭 大野 修一

授業説明

説明中心の授業が好きであると答えた児童の実態により受身型の傾向が強い。そこで、問いを作る活動を設定した。問いの設定方法は、グループで作ったものを全体で話し合い、学習問題とした。

次に自動車工場の見学が難しいのでインターネットを利用し調べ学習を行った。さらに、担任の自動車のボンネットを開け、実際に触れる場面も設定した。

研究討議

ア 児童の問いが的確であるか。

討議の視点として挙げられた「問いを問い直す。」について共通理解を行う。今回の問いとは「本時のめあて」のような学習問題ではなく、出合った社会事象から「〇〇について調べてみたいな。」という自発的な疑問を問いと捉える。それらの問いの答えを教師は用意しておく必要がある。

今回のようにクラスで話し合うことにより、教師が学ばせたいと思う問いが出てくる。思考が流れるように何を学ばせたいのか、どのような順番で学ばせるのか、どういう人間に育てたいのかという教師側の見通しもはっきりさせる必要がある。

イ 問いについて主体的に深めることができたか。

主体的に問いを解決していくためには、手がかりが必要である。手がかりとは、教科書の資料やグラフなどである。児童が解決したい問いがはっきりと認識されていると資料の選択やグラフの読み取りも主体的に取り組める。

② 指導 さぬき市立長尾小学校 教頭 亀井 健男

ア 思考力を育てるためには、既習事項を用いて考えを持つ。他人との考えを聞いて比較させていく。

イ 既習事項をもとに、どんなことを考えていくのか、初発の問いを丁寧に吟味して社会的に意味のある問いを取り上げていく。

ウ 工業を学ぶ意義とは、ものを作ることの価値を認識させることである。工業生産により我々の生活がどのように変わってきたかが、ものづくりの意味を見出してくれる。

エ 3年生の工場の仕事の学習では地域の理解を深めるために地場産業を学習する。5年生の学習は我が国の工業生産について理解を深めることがねらいとなっている。身近な人の工業での工夫や努力を知った上で、我が国の工業について考えていく。その違いをはっきりさせる必要がある。

本年度総括 小豆社研

土庄町立四海小学校 福井健文

1 研究主題

社会認識を深め、社会に関わる力を育てる学習

2 本年度の研究の概要

(1) 研究主題について

小学校の社会科教育においては、指導要領にある「公民的資質の基礎を養う」ことを究極のねらいとしている。そのねらいに迫るためには、地域や我が国における社会生活についての理解や、国土と歴史に対する理解と愛情を深めるとともに、持続可能な社会の実現を目指して主体的に生きようとする資質や能力の育成を図ることが重要である。これら社会科学習における重要な柱と言うべき内容を、小豆社研では大きく2つに分けてとらえた。一つは「社会認識を深める」こと。もう一つは「社会に関わる力を育てる」ことである。

社会認識を深め、社会に関わる力を育てるためには、社会に対するものの見方、考え方を身に付けることが不可欠である。そのために学習過程においては、問題解決的な学習を設定しなければならない。

その展開の筋道として考えられるのは、① 社会事象に関して事実認識を明確にすること

② 事実と事実を関連付けて理解させること ③ 社会事象の意味や働きを考えさせること

④ 学んだ意識をもとに自分の意思や価値判断を明らかにすることである。

このように、段階を踏むことによって、子どもの意識と思考の流れに沿った学習展開が可能になり、社会認識を育てていく素地が培われていくと考える。さらに、子どもの内面に現れた驚きや戸惑い、葛藤から発生した問題意識をもとに、効果的な資料の提示や調査、インタビューなどの体験的活動、自分で調べたことや考えたことを話し合い、発表する場を設定することによって、追求意識が継続され、社会認識が育ち、社会と関わる力が育っていくと考えられる。

社会認識を深めることについては、地域社会や我が国の社会生活、社会変化とその対応、我が国の歴史や伝統・文化、社会の一員としての参画といった各単元の社会事象について、観点に沿った情報収集や思考操作による整理などが行え、自分なりの言葉で正しく解釈できる力を伸ばしたい。そのために、どのような手だてが有効か探りたい。そして、社会に関わる力としての、地域や我が国に対する誇りや愛情、よりよい社会を持続するために自ら取り組もうとする態度や能力を、どのように育てればよいかを探るようにしたい。

(2) 研究活動

月 日	活 動	事 業 内 容
4月25日(金)	事業計画	組織づくり・研究テーマ・年間計画立案
6月17日(火)	第1回 授業研究	授業研究・5年「水産王国、ニッポン ～魚はいつまで食べられる?～」 授業者 靄羽美緒
7月 5日(土)	香社研定例会	提案者 靄羽美緒
7月28日(月)	香小研夏季研修会	第1回研究授業をもとにした提案
11月20日(木)	第2回 授業研究	授業研究・5年「情報化した社会とわたしたちの生活」 授業者 白川麻里
2月21日(土)	社会科フォーラムカップ	第2回研究授業をもとに実践交流にてパネル発表
随時		香社研指導計画作成、社会科の基礎・テスト編集

3 研究実践について

※ 第2回授業研究 第5学年「情報化した社会とわたしたちの生活」から抜粋

(1) 単元構成 (全18時間)

第1次	私たちの身の周りで利用されている情報について調べて学習の計画を立てよう。(2時間) ◎私たちの周りには多様な情報があることに気付き、情報にたいする関心を持ち、情報化した社会に関して詳しく調べる課題と学習の見通しをもつ。 ①私たちが生活している町並みや家庭の中にテレビ、新聞、パソコン、看板、値札、電話など様々な情報や情報手段があることを調べる。 ②携帯電話やスマートフォン、SNSの活用と問題点を考え、学習問題を設定する。
第2次	放送などのマスメディアは、情報をどのように伝えているのか調べよう。(4時間) ◎私たちは、テレビの伝える情報をどのように生かしているのか調べる。 ①どんな時に、どのようなテレビ番組を見ているのか調べる。 ②放送局からどのように情報が私たちのもとに送られているのかを教科書や資料を活用して調べ、

	ノートにまとめる。 ③様々なメディアの特徴について調べ、表にまとめる。 ④情報を送る側、受け取る側が気をつけていることについて考え、双方の立場に立った情報の選択・判断が大切であることを文章に表現する。
第3次	生活の中に普及している情報ネットワークの働きや自分たちの生活との関わりについて考えよう。(5時間) ⑥情報ネットワークを有効に活用している医療現場について調べ、私たちの生活との関わりについて考える。 ①私たちは、普段どのような情報にふれているのか話し合う。 ②病院では、情報が電子化されていることについて調べ、その利便性について話し合う。 ③総合病院と地域が、情報ネットワークによってどのように繋がっているのか調べ、ノートにまとめる。 ④私たちの命や健康が、情報ネットワークの活用により守られていることを多角的に考え、ノートにまとめる。 ⑤かがわ遠隔医療ネットワーク「K-MIX」について調べ、情報化の進展が医療に与える影響について考える。
第4次	情報とどのように関わっていくと良いのか考えよう。(5時間) ⑥情報を活用する上での光と影の部分について話し合い、情報を選んだり発信したりするときに注意しなければならないことについて考える。 ①生活の中のあふれている情報について、コマーシャルをどのように生かしているのかを例に考え、話し合う。 ②携帯電話やコンビニエンスストアの情報化について教科書の資料や自分の経験をもとに話し合う。 ③情報化の進展にともなって生じている問題点について資料から調べる。 ④情報を活用する上で、どのような問題点があるのか話し合い、自分の考えをノートにまとめる。 ⑤情報を活用する上で、情報を選んだり発信したりするときに注意しなければならないことについて考えながら、自分たちなりの考えをまとめ、発表する。(本時)
第5次	情報と私たちの生活について振り返り、情報活用について分かったことや自分たちの考えをまとめ、発信しよう。(2時間) ⑥これまで学んできたこと、情報と私たちの生活について振り返り、話し合い、「情報活用宣言」にまとめ、発信する。 ①グループで話し合ったことを全体で交流し、新たに考えたことを付け加えて、「情報活用宣言」にまとめ、発信する。

(2) 思考と表現を深める中心方策

① 第5学年「水産王国、ニッポン ～魚はいつまで食べられる?～」

子どもたちの食生活に目を向けさせ、身近にある水産物から学習を進め、「魚が食べられなくなるかもしれない。」という資料をもとに「なんとかしなければ。」という危機感をもたせ、学習を意欲的に進められるようにした。

「なぜ?」「どうして?」という思いをさらなる課題として捉え、課題解決していく学習を進めることで、水産業の未来のために自分ができることを、友達と話し合い、考えることで社会へ関わろうとする資質や能力を育てた。

② 第5学年「情報化した社会とわたしたちの生活」

医療分野のネットワークの仕組みについての学習では、関係図を作成させたり、実際にネットワークを利用させたりすることを通して、情報ネットワークの利便性について考えさせた。

情報化の進展が国民の生活に大きな影響を与えていることを理解し、様々な情報を自分たちが有効に活用するには、どのように情報に接していかなければならないかを考えさせた。

4 本年度の成果

第1次にて、将来の漁獲予測量や児童自身のゲームおよびネット利用時間という、身近で差し迫った状況への対応を出発点に学習問題を作ったことで、単元を通しての意欲化を図れた。

個人作業で調べたことをもとに、全体場で循環図を作り上げたり、KJ法によるグループでのまとめ活動を行ったりすることで、思考を再構成しながら表現と一体化することで社会認識を深めることができた。

5 本年度の課題(来年度の方角性)

郡内における若年および中堅教員による社会科学学習の研究体制を、現状からどのようにつないで深めていくか。

本年度総括 高松社研

高松市立十河小学校 真鍋 長嗣

1 研究主題

「自ら社会に参画する資質・能力を高め、社会科の魅力を創る教育」
～『板書』と『評価』で授業改革～

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

昨年度は研究テーマを「子どもが自信を深める授業をつくる ～板書計画と子どもの反応の実証による～」とし、授業研究において板書計画を作成した上で、それを切り口に授業づくりにおいてどのような課題があったのか、今後どのような改善を図っていけばいいか、といった具体の授業に焦点を当てた研究を行った。ただ、研究を進めていく中で「基本的な板書の要件は共通理解できたが、学習過程に応じた板書のあり方はどうなのか。」「学習評価についてもう少し日常化できないか。」といった課題も出てきた。

そこで、本年度は研究テーマを「自ら社会に参画する資質・能力を高め、社会科の魅力を創る教育」、サブテーマを「『板書』と『評価』で授業改革」と設定した。昨年度の研究で一定の成果があった板書については、単元の中におけるそれぞれの学習過程でどのような板書のあり方があるのか、そしてそれによりどのように授業づくりをしていけばいいかということについて研究を進めていった。また、評価については「単元・評価票」を活用し、評価の日常化を図っていった。なお、本年度の主な研究内容は、以下の通りである。

【主な研究内容】

- (1) 社会認識をひらき、教材とむすび、社会科学習の本質を探る。
- (2) 板書計画を作成し、子供の反応に基づいた実証的な授業づくりを行う。
- (3) 評価の日常化を図る学習評価
- (4) 教科書と地域教材の関連を考え、効果的な活用方法を探る。
- (5) 見通しのある単元構成による学習の展開を図る。
- (6) 再構成の学習による思考力の育成を図る。
- (7) 社会科ノートを通して、自己評価力を育成するとともに、家庭との連携を図っていく。

(2) 研究活動

日時	活動	内容
4月17日	教科主任研修会	本年度の運営、研究、各種事業の計画等 各ブロックごとに授業研究、研究討議 分科会提案協議 市提案、分科会Ⅰ・Ⅱ提案 4年（郷土）・5年（食料生産）指導案検討
6月12日	市定例研修会①（教科研）	
7月25日	夏季研修会（市）	
7月28日	夏季研修会（県）	
9月18日	全小社研へ向けた公開授業 事前研修会①	
10月30日	市定例研修会②（教科研）	各ブロックごとに授業研究、研究討議 6年（歴史）指導案検討
11月15日	全小社研へ向けた公開授業 事前研修会②	
2月14日	市社研研究委員会	今年度の研究の総括と来年度の方向性の検討 太田南小実践、国分寺南部小実践提案
2月21日	香社研研究フォーラム	

3 研究実践について

第1回定例研修会 平成26年 6月12日（木）
第2回定例研修会 平成26年10月30日（木）

今年度も北、南の2ブロックに分かれ、下記の通り毎回4本の実践を行っていった。第1回の教科研では、夏季研修会に向けて各学習過程に応じた授業や板書のあり方や単元を通じた日常的な評価のあり方について市社研全体で検討し、深まりのある実践を行うことができた。また、第2回の

教科研では子どもたちの思考を深める学習活動（思考操作）のあり方、そして単元展開において子どもの意欲をどのようにつないでいくかということについて議論を深めることができた。

		授業者	単元名	実践の概要
第1回 教科研	北ブロック	下笠居小学校 川田 美穂	6年「武士の世の中へ」	個の課題から「学習課題」をつくり、学習の「見通し」を立てて、「学習問題」を設定する学習を探っていた。【見通しの段階】
		屋島西小学校 笠井 誉子	5年「国土の地形と気候の特色と人々の暮らし」	教科書教材で学んだ見方・考え方を活用教材に生かして、根拠を明確にしながら、意味を予想する学習を探っていた。【習得から活用の段階】
	南ブロック	浅野小学校 水口 純	3年「市のようす」	単元を通して学んだ一つ一つの学びや考えを振り返り、それをまとめて高松市について概念化していく学習を探っていた。【概念化の段階】
		川東小学校 池田 康輔	3年「市のようす」	地域社会の一員として、学んだ成果を地域との関わりから見直してポスターに表現し、発信・参画につなぐ学習を探っていた。【発信の段階】
第2回 教科研	北ブロック	屋島東小学校 間嶋 大輔	3年「店ではたらく人」	見学により調べた事項の類別操作や自分たちの思いとお店の思いを比較するといった思考操作により、お店の工夫に迫ることができた。
		太田南小学校 山崎 麻子	6年「世界に歩み出した日本」	明治時代を4つの視点（政治、産業、文化、人権）に分けて調べ、年表にまとめることで、明治の時代背景を広い視野からとらえられた。
	南ブロック	国分寺北部小学校 福家 正人	6年「世界に歩み出した日本」	歴史的事象や人物に関する学習を、現在の日本の課題への考え方に生かすことで「歴史を自分の生き方に生かす」という姿勢を学んでいった。
		国分寺南部小学校 高木 浩彰	3年「農家の仕事」	農家の工夫や苦勞を取り上げて終わるのではなく、過去と現在の苦勞や工夫、そして課題を踏まえてこれからの農業のあり方を考えていった。

4 本年度の成果

- (1) 夏季研修会に向けて、学習過程に応じた授業づくりの在り方について議論し、「見通し・意欲化」「習得」「活用」「概念化」「発信」の5つに分けて実践を行い、各実践における単元展開、板書、児童の反応等を分科会で提案することができた。市全体で研究を深めていく上で、大変貴重な実践となった。【夏季研修会における提案】
- (2) 教師主導の学習から、子どもの主体性を大切にした学習に転換するために、子どもの既存の知識や経験とつないで学習問題をともに設定すること、深い問題解決につながる思考操作の場を設定すること、学んだことを発信することで社会参画の素地を養うことなどについて、子どもや地域の実態に応じた研究が進められた。【子どもたちの主体性を大切にした研究】
- (3) 今年度の研究では、昨年度に引き続き「教科書をどう扱うか」ということについて授業づくりを通して研究が進められた。単元の中で教科書教材で習得し、習得した事項や学び方を地域教材で活用し、深めていくという単元展開が図られた。【教科書の活用方法】

5 本年度の課題（来年度の方角性）

- (1) これからの子どもたちに必要とされる資質・能力について洗い出し、市社研としての方角性を定めていくとともに、研究の方角が「内容・教材の構造」「学習の構造」などに表現できるように共通理解を図る。【資質・能力についての研究】
- (2) 平成28年度の全国大会へ向けて、これまでの実践を整理していき、市社研としての研究の歩みをまとめていく。【研究の共有化】

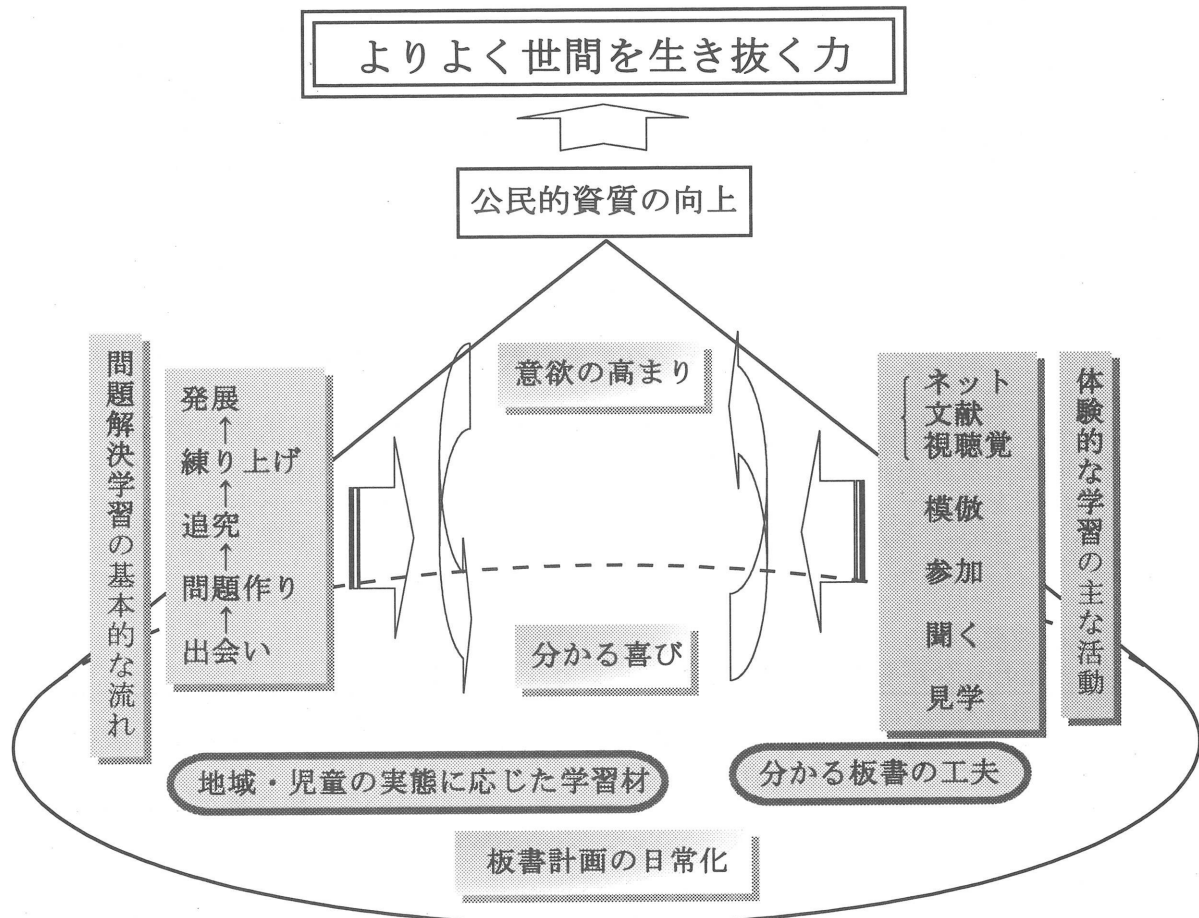
本年度総括 坂出・綾歌社研

宇多津町立宇多津小学校 河野 富男

1 研究主題

分かる喜びを実感できる社会科学習の展開
－日常的な板書計画の活用を通して－

2 本年度の研究の概要



(1) 研究主題について

体験的な学習は自然体験，社会体験，生活経験が不足し，人とのかかわる力が不足している現代の子どもたちにとって，新鮮で楽しさの期待できる学習になる。これは学習する意欲の源であり，学ぶ力の源でもある。

そして，問題解決的な活動を取り入れた学習は，課題を追究していく中で，一人一人の疑問が解決したときに「そうか，そういうことか。」「よし，できた。分かった。」という喜びを感じることができる。

体験的な学習や問題解決的な学習を充実させることにより学ぶ意欲を高め，思考力，判断力を育てることを目指している。

坂・綾社研で目指す児童像

- 社会的事象に驚きや疑問を感じ，意欲的に追究することができる児童
- 既習の基礎・基本の事柄や内容を使って，話し合ったり発表したりすることができる児童
- 調べたことを根拠にして，比較したり，様々な立場から考えることができる児童
- 問題解決に必要な資料を収集・活用するとともに，考えをノートにまとめることができる児童

(2) 研究活動

日にち	場所	研修会名	内 容	参加者
3月下旬	坂・坂出小	事前検討会	26年度の役割分担・計画	研究部
4月16日(水)	坂・東部小	坂綾小研総会	26年度の組織作り	坂綾全員
5月29日(木)	綾・宇多津北小	坂綾小研教科研事前検討会	研究授業Ⅰの事前研修会	坂綾全員
6月11日(水)	綾・宇多津北小	坂綾小研教科研	研究授業Ⅰ	坂綾全員
7月28日(月)	高松商工会議所	夏季研	夏季研	香小研社会科部員
7月30日(火) 8月19日(火)	綾・宇多津小	次年度夏季研の研修会	夏季研の全体提案、分科会提案打ち合わせ	坂綾全員
20日(水) 27日(水)				研究部
9月27日(土)	坂・勤労福祉センター	香社研定例会	提案発表	香小研社会科部員
10月9日(木)	坂・坂出小	坂綾小研教科研事前検討会	研究授業Ⅱの事前研修会	研究部
10月23日(木)	坂・坂出小	坂綾小研教科研	研究授業Ⅱ	坂綾全員
1月16日(水)	綾・昭和小学	研究フォーラム事前検討会	研究フォーラムの役割分担等	研究部
2月10日(火)	坂・坂出小	次年度夏季研の研修会	夏季研の全体提案・計画打ち合わせ	研究部
2月20日(土)	高松附属小	研究フォーラム	研究フォーラム発表	香小研社会科部員

3 研究の実践について

授業研究Ⅰでは、「武士は地方ではどんな暮らしをしていたのだろう。」という学習問題で授業を展開した。写真資料や児童の予想やICTを活用し地図、年表、絵図をもとに武士の館、人、館のまわりについて追求していく授業であった。グループごとに資料から事実を見つけ当時の武士について全体で話し合い武士の様子を多面的・総合的に捉えていくことができた。

授業研究Ⅱでは、「どうして多くの人がこの工場のうどんを買い求めるのだろう。」という学習問題で授業を展開した。児童が生地をねかせる時間、包丁きり、あわであらう等のカードからをグループの話し合い活動を通してKJ法により安全・安心、おいしさ、客のニーズへと捉えることができた。グループから全体への話し合い活動により思考していく、提案性のある授業であった。

4 本年度の成果

(1) 地域と関わりながら自分の考えを見直すことができた

学習問題に対して考えを出し合い、交流し合うときに、学級内の友達に限らず、地域の方を招いて話しを聞き、自分の考えを吟味したり、検討したりする場を設けた。また、自分たちの考えを保護者の方へ提案し、コメントをもらったり、ゲストティーチャーから評価してもらったりして考え振り返った。そうすることで、社会性のある思考や判断ができるようになった。

(2) 資料提示の工夫ができた

単元を貫く課題を考えさせるような資料の選択、提示の工夫を行った。興味・関心が、思考・判断に変質するような授業を意識し、最初にもった単元を貫く課題が、自分の問題として、考えることができるようにした。単元の導入部分に焦点を当てた研究ができた。

(3) 体験の取り入れ方の工夫ができた

体験に根ざした問題解決的な学習が必要であると考え、体験的な学習を積極的に組み入れてきた。単元構想を組む際には、体験活動の位置付けとねらいを明確にできた。そのことにより、子ども自らが意欲をもって主体的に問題を見付け、自分とのかかわりの中で問題を解決したり、身に付けた力を生きて働く力にしたりすることができた。

5 本年度の課題（来年度の方角性）

今年度はサブテーマを「日常的な板書計画の活用を通して」として教科書や資料集等を活用した板書構造の研究に視点を当て、児童にとってわかりやすい社会科学習の授業実践を試みた。2つの研究授業から板書について研究の具体化を図ることができた。来年度の夏季研修会に向けて、日常で活用できる板書計画の開発とともに教材開発を行い、思考力を育成していける授業を積み重ねていきたい。

本年度総括 丸亀社研

丸亀市立郡家小学校 和田 早苗

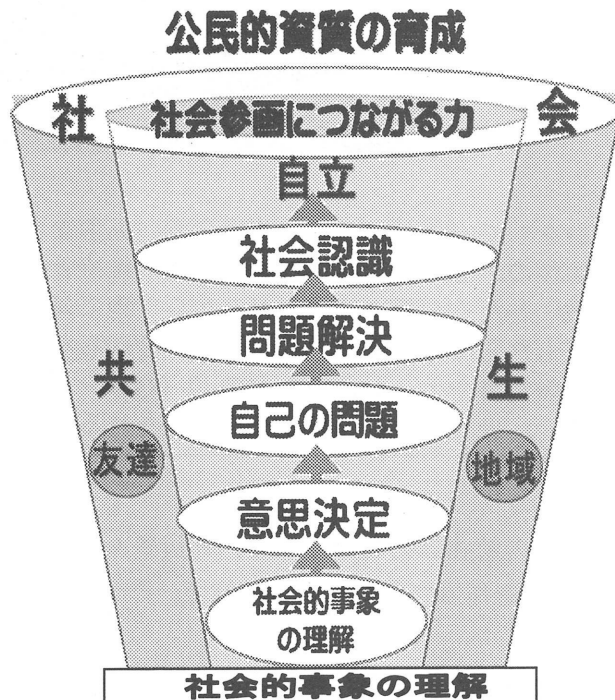
1 研究主題

自立と共生を育む社会科学学習

2 本年度の研究の概要

(1) 研究主題について

これからの時代をたくましく生き抜くためには、小学校段階から社会科を通じて、生涯を通じて学び続ける力、自分の頭で考える力及び他者との協働の中から新しい価値を見出していく力を身に付けていくことが望まれている。丸亀市小学校教育研究会社会科部会では、社会的事象に関する基礎的な知識や概念、技能を身に付け、自分の考えをもち（自立）、他者との協働を通じてよりよい社会を形成しようとする態度（共生）を社会科教育で身に付けるべき資質能力として大切であると考えた。



社会に役立ちたいという気持ちが高まり、社会のために、行動しようとする。



友達との話し合いを通して、自己有用感が生まれる。友達地域等と共生しながら問題を解決していく。



自ら意思決定をすることで、一人ひとりの問題となり、さらに解決しようという意欲が高まる。



課題を設定し、見通しと意欲をもって学習することで、社会的事象の理解がさらに深まる。

(2) 研究活動

日 時	会 場	研 究 内 容
4月16日	岡田小	研究組織づくり，研究主題決定，年間計画作成，夏季研勉強会
5月14日	垂水小	丸小研事前勉強会 6年「武士の世の中へ」
5月21日	垂水小	丸小研事前勉強会 6年「武士の世の中へ」
5月27日	垂水小	丸小研事前研修会 6年「武士の世の中へ」
6月 4日	垂水小	丸小研研究授業 6年「武士の世の中へ」 授業者 丸亀市立垂水小学校 教諭 佐藤 南 指導者 香川大学教育学部附属高松小学校 教諭 黒田 拓志
6月 6日	飯山北小	定例研事前勉強会 6年「天皇中心の国づくり」
6月 14日	岡田コミュニティ	定例研修会 6年「天皇中心の国づくり」 提案者 丸亀市立飯山南小学校 教諭 乗松 直樹 指導者 香川県教育委員会 指導主事 山内 秀則
7月12日	垂水小	夏季研事前勉強会
7月28日	高松商工会議所	夏季研実践発表 6年「武士の世の中へ」 提案者 垂水小 教諭 佐藤 南
9月12日	城南小	丸小研勉強会 4年「郷土をひらく」

10月29日	郡家小	丸小研勉強会	5年「自然災害を防ぐ」
11月5日	岡田小	丸小研勉強会	5年「自然災害を防ぐ」
12月3日	城辰小	丸小研 教材研究	5年「自然災害を防ぐ」 ①自主防災活動について 指導者 川西自主防災会 会長 岩崎 正朔 ②IT教材について 指導者 丸亀市立郡家小学校 教諭 増井 泰弘
1月9日 2月13日	郡家小	研究フォーラム事前研修会	
2月21日	附属高松小	研究フォーラム	丸亀市立郡家小学校 教諭 櫻井 道芳

3 研究実践について

研究授業 <第6学年「武士の世の中へ」>

ー多面的な視点から物事を考えるための教材開発ー

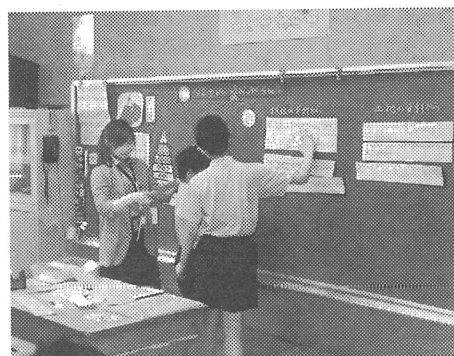
前時と本時で、使った資料は全く同じものであったが、そこから分かる事実は、違うものであった。このように、同じ資料を違う視点で見たり考えたりする活動を取り入れることにより、資料を読み取る力や多様な視点から考える力が高まると実感できた。

問いに対する意見を個人で考えた後、班で考えることによって幅広い意見を知ることができた。また、出た意見を書くようにすることにより個人の意見が埋もれることがなく、児童の授業参加意欲を高めることができた。

教材研究 <第5学年「自然災害を防ぐ」>

ー生活に密着し、生かすための教材開発ー

具体的に取り組んでいる防災活動について講話をしていただいたり、防災倉庫の見学をさせていただいたりした。災害前の予防対策、災害時災害後の応急対応、防災教育の推進、維持管理するための業務、自主防災会会員の補強、資金など多岐にわたるお話には、ふだんから災害に対して備えておかなければならないと感じた。そして、子どもたちにも自分にいつ起こるか分からないこととして、学習に臨んでほしいと強く感じた。また、教科書やテレビ番組などのIT教材について研究した。地震を実際に授業で体験することはできない。少しでも自分事として捉えさせるために、IT教材を上手に活用したいと感じた。



4 本年度の成果

- 研究授業や夏季研修会、社会科授業をするための勉強会をもつことで、部員各々が研究主題について分析し、研究主題を念頭に、授業や提案発表を作っていくことができた。そうすることで、研究の方向や新たな課題が一層はっきりしてきた。
- 研究授業において「社会的事象の認識・意思決定・問題解決・社会認識・社会参画への意欲」と、自立と共生を育むための授業の流れが確立し、授業者の意図を反映した提案性のある授業になった。
- 防災教育の視点から社会科教育を考えていくことが喫緊の課題であることから、本年度は単元「自然災害を防ぐ」を教材開発するため、県内における先導的な取組を行っている川西自主防災会への現地研修を行った。授業は教材が命であり、現地に学ぶことで必要な教材を開発することの重要性を改めて認識するとともに、現地に行くことが不可能な場合は映像で訴えることが効果的であることが確認された。

5 本年度の課題

- 自立の部分「判断・意思決定の場」の意味や目的などをさらに明確にし、共生の部分「話し合い」「社会参画」に視点を置いた研究を進めていきたい。
- 話し合いについては、学習内容とカード操作で抽出された要素の関係性を全体で話し合う場をもったり、カード操作を用いた学習を取り入れたりするなど、実践研究を重ねていきたい。

本年度総括 仲善社研

多度津町立四箇小学校 篠原 正議

1 研究主題

人間の営みに学び、広い視野を育てる社会科学学習の展開

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

小学校社会科の教科目標は、小学校社会科のねらいの特色を示す「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て」という部分と、小学校及び中学校社会科の共通の究極的なねらいである「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」という部分から構成されている。

公民的資質は、平和で民主的な国家・社会の形成者としての自覚をもち、自他の人格を互いに尊重し合うこと、社会的義務や責任を果たそうとすること、社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりすることなどの態度や能力であると考えられる。そうした公民的資質は、日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現を目指すなど、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎をも含むものであると考えられる。

『小学校学習指導要領解説 社会編』P.12

仲善社研ではこの社会科のねらいを達成するために「子どもたちが社会を構成する人と人のつながりを理解し、広い視野に立って社会的事象の意味や人間の行為の在り方を考えること」であると捉え、今年度も上記の研究テーマを設定した。

このテーマの下、実践研究を行うことで社会科の目標である公民的資質の基礎が養われ、創造的に未来を切り拓くことができる子どもが育つのではないかと考えている。

そこで、本年度の研究内容は、以下のように設定した。

- ① 人間の行為に焦点をあてた教材研究
- ② 創造的に問題を解決する力を育成する単元構成
- ③ 思考を深める接続語の活用

(2) 研究活動

日 時	活 動	内 容
4 月 23 日	香小研仲善支部総会	組織・運営について
6 月 10 日	香小研仲善支部社会科部研修会	授業研究 6 年「武士の世の中へ」 授業者 善通寺市立西部小学校 教諭 藤田 啓明
6 月 14 日	香社研定例会（丸亀・仲善）	提案発表 6 年「武士の世の中へ」 発表者 善通寺市立東部小学校 教諭 香川 卓也 善通寺市立西部小学校 教諭 藤田 啓明
7 月 28 日	香小研社会科部夏季研修会	提案発表 4 年「事故や事件からくらしを守ろう」 －われら筆岡防衛隊－ 発表者 善通寺市立筆岡小学校 教諭 尾崎 純一

11月20日	香小研仲善支部社会科部研修会	授業研究 6年「世界に歩み出した日本」 授業者 多度津町立四箇小学校 教諭 滝井 康隆
2月21日	香社研研究フォーラム	提案発表 4年「わたしたちの県」 発表者 琴平町立琴平小学校 教諭 竹森 仁志

3 研究実践について

(1) 人間の行為に焦点をあてた教材研究

藤田実践では、「なぜ、鎌倉幕府は滅んでしまったのだろう」という学習問題を設定し、鎌倉幕府の「御恩と奉公」という人間の行為に焦点をあて、信頼関係で結ばれた鎌倉幕府の仕組みを理解する授業が実践された。

滝井実践では、「日本が戦争で条約改正したのか調べよう」という学習問題を設定し、条約改正に向けて努力してきた日本人の行為に焦点をあて、産業、戦争、文化等の面での発展の様子を「外国と対等な関係になったか」という視点とつなぎながら学習を展開した。

(2) 創造的に問題を解決する力を育成する単元構成

藤田実践では、鎌倉幕府が滅んだ原因を「蘇我氏の滅亡」「平氏の滅亡」で学習したことから予想することができた。それは、権力者が滅びる原因は「権力者が自分勝手な政治を行う」「人々の不満が高まる」という学びが身に付いているからである。そして、鎌倉幕府において「武士の不満が高まる」とは、戦いで活躍（奉公）したのに土地（御恩）をもらえないということであるという考えを導いた。

滝井実践では、ノルマントン号事件から、条約改正には外国と対等な国になる必要があると考え、単元を通して日本の国際的地位が向上したかどうかを考えていった。本時では、戦争をして外国に追いつくというのはどういうことなのかを予想させ、欧米の植民地政策とつないで「戦争に勝つ」「土地を増やす（お金）」「優れた武器を持つ」「外国と協力する」というような様々な考えを導き出した。また、2つの「風刺画」を比較することで、その当時の日本の立場や時代の様相を理解させ、「風刺画」の活用について提案性のある授業であった。

4 本年度の成果

授業の事前研修会では、「単元をどう流すか」「子どもの意識はどう流れていくのか」を話し合うところから始まり、本時の授業内容では「その学習問題はどのようにやってできるのか」「その資料で子どもは何が分かり何を考えるのか」等を検討していく。そのような話し合いの中で、この単元で大切なことは何なのか明確になり自信をもって授業を実践することができた。

また、資料から調べる学習だけでなく、社会の問題を発見し、自分なりの根拠をもって予想し、それを話し合い吟味し、最善の解決策を創造的に生み出していくような学習を意図的に展開することで、子どもが意欲的に取り組む姿が見られた。

5 本年度の課題（来年度の方向性）

今年度も若い先生方が中心となって実践、提案してくださっており、事前の研修会で、いろいろな先生方がそれぞれの立場から感じた質問や意見を発言し、みんなで議論しながらよりよい授業を考えていくことができた。しかし、授業者の学年や単元等、いろいろな制約の中での実践であるので、研究の方向として示した内容が全て網羅できていないわけではない。今後も多くの部員の先生方の実践内容を共有しながら、研究を進めていきたいと考えている。

本年度総括 三観社研

三豊市立財田中小学校 岩橋秀司

1 研究主題

個が育ち、生きる社会科学習の創造 ～ 考える力を育てる社会科学習をめざして ～

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

社会科の目標は、「公民的資質の基礎を養う」ことである。三観社研では、2000年度から公民的資質の基礎を養うとは、「経験」に照らし合わせながら、自分なりに物事を考え実践することのできる意思決定の主体を育成することだと考えてきた。このような意思決定の主体を「個」と定義する。そして我々は「公」と「私」のベストバランスを考えながら意思決定できる「個」を育てたい。本年度もこの「『個』をいかに育てるか」について継続研究をしていきたいと考え、授業でその姿を模索し、研究を進めてきた。

研究の方向 「考える社会科学習」 ～ 考える内容と考えさせるための問い ～

社会科は内容教科である。したがって、研究の方向は、学びの手順や方法よりもその内容が重要である。だからこそ教材研究により学ばせる中身を明確にする（単元観の確立）のことを授業づくりの根底としたい。

また、「考える社会科学習」を具現化する視点として、問いを大切にする。子どもの学びは問いに始まる。追求意欲が高まるような切実性のある問いを作ることで、子どもたちが主体的に学ぶ学習を展開するのである。

研究の視点 「考える社会科学習を支えるもの」

「切実性のある問い」の研究

- 切実性をもたらす教材とは何か
(教材と教材とのズレ、教材と子どもの意識のズレ等)
- 切実性のある問いを持たせるための学習過程
(確かな事実認識をさせる、子どもと子どもの意識のズレを生じさせる)

単元観の確立をめざす教材研究

- 単元観を確立していくために必要な3つの作業
(学習指導要領の分析・社会的事象の分析・児童の実態分析)
- 単元観を確立していくために必要な視点
(育てたい子どもの社会認識を核とした教材研究)

(2) 研究活動

日 時	活 動	内 容
4月17日	三観社研運営委員会	三観社研の研究・運営について
5月10日	三観社研総会	三観社研の組織・運営について・指導案検討
7月25日	三観小研社会科部夏季研修会	講演ならびに指導案検討
7月28日	香小研社会科部夏季研修会	提案発表 3年「のこしたいもの、つたえたいもの」
10月25日	香社研定例会三豊集会	実践発表5年「わたしたちの生活と食料生産」
10月29日	三観小研社会科部研修会	授業研究 4年「ごみのしよりと利用」
1月10日	三観社研冬の研修会	提案 「社会科授業についての実践提案」 提案ならびに指導案検討
2月9日	三観小研部員研修会	授業研究 5年「自然災害を防ぐ」
2月21日	香社研社会科フォーラムカップ	実践交流 5年「自然災害を防ぐ」
2月26日	三観社研運営委員会	三観社研今年度の反省と次年度構想

3 研究実践について

(1) 5年「わたしたちの生活と食料生産」の実践より

本単元では、香川県が独自に品種改良をした米である「おいでまい」を教材化した。この米は、地球温暖化の原因による米の品質低下の問題点を解消するために開発した品種である。これを上げることで、「香川の米づくりの問題点」が見え、見通しをもって子どもが学ぶことができた実践であった。

子どもたちは、香川県は一等米比率が全国46位という事実を知り驚いた。そして、「どうにかしないとイケない」という気持ちから一等米比率が常に上位の山形県庄内平野を調べる必然性が高まり、意欲的な学習につながった。また、「おいでまい」の教材化により、温暖化の影響とその対策という、我が国が抱える新たな課題について学ぶことができた。

(2) 4年「ごみのしよりと利用」の実践より

本単元では、廃棄物の処理と自分たちの生活とのかかわりを通して、市民としてごみの分別に協力し、資源として再利用するため、一人ひとりの分別意識が高まった実践であった。

子どもたちは廃棄物の種類や量・行方を調査し、資源の有効な利用の具体的な取り組みやその必要性を話し合うことで問いをつくる。しかし、ごみの減量化は思ったほど進んでいないことを知り、ごみ問題を解決するために「わたしたちにできることはないのか」という切実性のある問いをつくった。現実社会に近づけて新たな問いを生み出すことで、社会的事象に関心をもち主体的に調べ、学ぶことができた。

(3) 5年「自然災害を防ぐ」の実践より

本単元で学習する内容には、公助に分類されるものが多い、しかし、公助を最大限に発揮するためには共助の取り組みが不可欠である。その共助の典型的な取組として北淡町に生きる人を人々の行動を取り上げて、防災対策を考える実践であった。

「災害大国日本」という事実とともに、香川県も大きな地震による災害が近未来に起こるということを学ぶ。そのことにより子どもたちは、どのような備えをしているのか、また、する必要があるのかということを調べ、考える必然性が生まれてくるのである。本実践では、北淡町が大きな災害があったにもかかわらず、最小限の被害にとどまった理由を考えことから始まる。その結果になった理由を学ぶことで、災害に備えた公助が最大限の効力を発揮するためのコミュニティとしてのつながりの大切さに気付いて行った実践であった。

4 本年度の成果

- 香川県の米づくりの問題点を上げることや、ごみ問題など、身近な社会的事象を問題点とすることで、子どもたちの興味関心や、問題意識を高めることができた。
- 単元観を確立するために、学習指導要領を読み解き、学習指導要領に基づいて教材解釈を行うことができた。そのことで、子どもたちが、社会的事象の意味を自分とのかかわりで理解することができた。
- 「切実性のある問い」という面からは、子どもたちの経験を生かし、その経験を軸にした授業展開が有効であった。

5 本年度の課題（来年度の方角性）

- 平成28年度全小社研香川大会に向けて、「問い」を重視した問題解決的な学習に重点を置いた研究を推進していく。

香社研だより vol. 1

仲善社研

発行者 香川県小学校社会科教育研究会

香川県小学校教育研究会社会科部会

会長 野村 一夫

発行日 平成26年 6月 14日(土)

香社研テーマ

自ら社会に参画する資質・能力を高め、社会科の魅力を創る教育

仲善社研テーマ

人間の営みに学び、広い視野を育てる社会科学習の展開

6月定例会 丸亀・仲善ブロック集会

平成26年6月14日(土) 於: 丸亀市岡田コミュニティセンター

実践提案 善通寺市立東部小学校 香川 卓也先生

善通寺市立西部小学校 藤田 啓明先生

第6学年 「元の大軍が攻めてくる」

1 提案の主張

「単元の見通し図」で学習の骨組みをつくる。

単元構成を考えるときに、「単元の見通し図」を作成することで次のような利点がある。

- 資料(事実)を基に考えることで、机上の空論に陥ることなく、具体的に学習の骨組みを吟味することができる。
- 資料を一層精選できる。
 - ・ 資料の役割を整理することができる。(課題をつかむ、調べで使う)
 - ・ 調べで使う資料を身に付けたい学習内容(まとめと照らし合わせながら吟味することで、資料の吟味が一層進む。
- 1時間区切りでなく、単元の流れを一貫してたどることで既習(内容・資料)を生かすことができる。
 - ・ 既習内容とのズレ → 学習問題
 - ・ 既習内容との比較 → 内容理解の深まり
 - ・ 既習資料の活用 → 資料には学習内容から考えて数時間(一単元)使えるものがある。既習資料は、読み取り方も分かっており、子どもの理解が進みやすい。また、経験を積みれば積むほど、資料の読み取りは確かなものになる。



2 討議内容

たくさんのご意見をいただいた。「学習は流動的であるために、どの資料でどんな思考を辿るかを単元に入る前に決めることで無理が出てくることはないのか。」「単元の見通し図は、従来の板書計画、ノート計画とどのように違うのか。」といった質問があった。単元の見通し図に示しているのは基本資料であり、この資料で子どもにこのように考えさせたいというものである。実際の授業では補助資料も必要になるし、子どもの興味・関心が離れていけば修正も必要である。しかし、修正しなければいけないような見通し図は、単元観や児童の実態の把握が十分ではなかったと反省しなければならないであろう。また、ノート計画、板書計画では、全ての資料が必要になり、どの資料をどこに貼り、この言葉は何色でどこに書くかまで吟味しておかなければならないので、単元の見通し図よりもはるかに時間がかかり「単元の骨組みをしっかりとさせる」という目的でいえば見通し図で十分であると考えた。

3 ご指導

香川県教育委員会義務教育課主任指導主事 山内秀則 先生

発表者や参観者の若い先生のために、具体的な場面を取り上げながら、問題解決学習は、資料を窓口として、「見えるもの」から「見えないもの」に気付かせることであるということ、「子どもに学ぶ」とは、反応を読み切ることであり、子どもの認識の壁はどこにあるのかを知ること、「教えなければならない（見極める）」→「教えたい（深い教材研究の中から削る作業）」→「学びたい（子どもの側に立つこと）」が大切であること等、基本的なことを教えていただいた。

香社研だより vol.1

丸亀社研

発行者 香川県小学校社会科教育研究会
香川県小学校教育研究会社会科部会
会長 野村 一夫

香社研テーマ

自ら社会に参画する資質・能力を高め、社会科の魅力を創る教育

丸社研テーマ

自立と共生を育む社会科学習

6月定例会 丸亀集会 平成26年6月17日(土) 於: 岡田コミュニティセンター

＜実践提案＞ 丸亀市立飯山南小学校 乗松 直樹 先生

6年「天皇中心の国づくり」

1 主張点

- (1) 単元を貫く課題の設定
- (2) 意思決定する場の設定
- (3) 社会認識を深めるための工夫
- (4) 社会参画への意欲をもたせるための工夫



2 本単元での取組

(1) 単元を貫く課題の設定

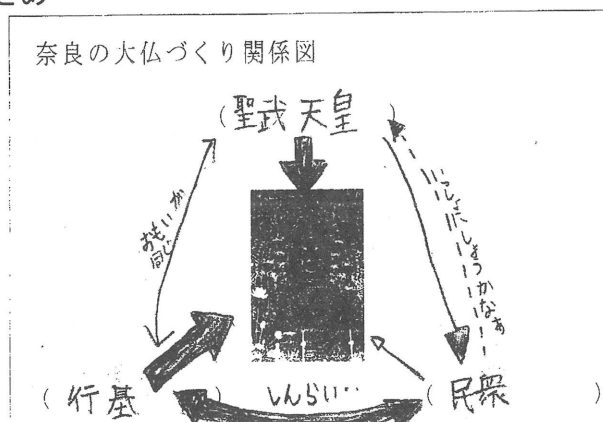
本単元の第1次では、児童の問いを引き出すために、実物大の大仏をつくる計画を立て、体育館で制作した。それにより、教師から与えられた課題ではなく、自分自身の課題として、正面から向き合うことができたと考える。

(2) 対立場面の設定と根拠ある意思決定に基づいた調べ学習

本時で大仏づくりについて考える際、まず始めに自分なら大仏づくりに参加するかどうか意思決定の場面を設けた。導入で庶民の立場に立って意思決定をしたことにより、児童はその後も庶民の立場で物事を考えることができていた。「参加しない」と答えた児童も、行基の働きや天皇の行動を調べていく中で気持ちに変化し、最終的には27人もの児童が大仏づくりに「参加する」と答えた。

(3) 社会認識を深めるための関係図によるまとめ

本時のまとめは、関係図を用いて行った。関係図を用いることによって、奈良の大仏は聖武天皇、行基、庶民の協力があったからこそ造ることができたのだと、三つの立場を関係づけて考えを深めることができた。



(4) 社会参画のための素地を養う新聞づくり

単元の最後に、奈良の大仏づくりに関する新聞づくりを行った。奈良の大仏という歴史的遺産が、聖武天皇だけではなく、行基や大勢の人々の参加により建てられたことから、現在の自分がどのようなことを学ぶことができたのかをまとめることで、社会参画への意欲を高めることができると考えたからである。当時の人々の思いや、修復してきた人々の思いを考えることで、歴史的な遺産を大切にする心を持ち、我が国の歴史に対する愛情を深めることができたと思う。

3 質問・討議内容

(1) 質問

- ・「仏教の力」、当時の世の中についての児童の認識はどういうものだったのか。

→はじめは、「仏教ってそんなにすごいのか？」という意識だった。聖徳太子の時代から仏教の力が重んじられてきていることをおさえ、それが行基などの力により貴族から民衆へと広がっていったものと理解していった。

(2) 対立場面の設定と根拠ある意思決定について

- ・意思決定することで、庶民の思いに寄り添い、終末まで学習を進めることができた。
- ・意思決定では、自分の考えをもつということが大切になってくる。個の意思決定の後、グループ交流などを通して集団の意思決定をしていくことが、共生につながるのではないかと。

(3) 関係図によるまとめについて

- ・この時代においては、聖武天皇だけを取り上げることが多いが、3つの立場を取り上げ、関係図にまとめたことで、いろいろな立場から歴史を考えることができた。
- ・意思決定の場では庶民の立場から考えたが、関係図を考えることで、三者の立場から考えることができたのではないかと。
- ・関係図を用いることで、奈良の大仏が多くの人々の願いによって造立されたことを認識し、これからは奈良の大仏を大切にしていかなければならないという気持ちが芽生えたのではないかと。

4 ご指導

香川県教育委員会事務局義務教育課主任指導主事 山内 秀則先生

- ・新聞紙での大仏づくりという体験を通し、「こんな大きいものをだれがなんのためにどうやって造ったのか？」という単元を貫く問いが子どもの中に生まれた。その素朴な問いに対し、予想させることでさらに強い問いになる。
- ・判断・意思決定は、2回以上でないという意味をもたない。
- ・3つの視点から関係図を考えさせたのはよかった。この関係図を言葉を用いて説明させることが大切である。関係図の線1本にも意味がある。なぜ点線か、なぜ太線なのか言語化させ、言葉にこだわりをもたせることで思考し、さらに理解が深まる。

【編集後記】（香社研事務局）

仲善社研さんと丸亀社研さんの提案発表。どちらの提案者も若く、これからの香社研を背負っていくであろう人たちの発表であった。両提案ともに6年生の歴史教材。当時の人々の思いに迫るために、様々な手だてを工夫されていました。現在とは全く違う時代。どれだけその時代の人々に寄り添えるか研究していかなければならないと感じました。山内先生からは、授業作りの基本的な手法について、「児童の意識をどのように予測するのか」などの的確なご指摘をいただきました。

香社研だより vol.2

発行者 香川県小学校社会科教育研究会

香川県小学校教育研究会社会科部会

会長 野村 一夫

発行日 平成 26年 9月 27日 (土)

小豆社研テーマ

「社会認識を深め、社会に関わる力を育てる学習」

実践提案 土庄町立土庄小学校 靄羽美緒先生

第6学年 「天皇中心の国づくり～聖徳太子の国づくり～」

1 提案の主張

- ① 社会認識を深めることや社会に関わる力を育てることが、公民的資質の基礎を育成することになる。
- ② 社会認識を深め、社会に関わる力を育てるためには、社会に対するものの見方、考え方を身に付けることが不可欠である。
- ③ そのために学習過程においては、問題解決的な学習を設定しなければならない。

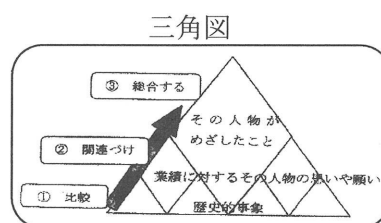
○授業の流れ

前時 教科書「天皇中心の国づくり」を見て、聖徳太子が政治の仕組みなど大陸の文化を積極的に取り入れようとしたことや聖徳太子が亡くなった後の新しい国づくりを予想し、学習問題をつくる。

- ① 教科書を読み、出来事を年表に位置づける。
- ② 出来上がった年表や教科書「天皇中心の国づくり」を見て、知っていることや疑問、調べたことについての話し合い、これからの学習の見通しをもつ。

本時 聖徳太子の業績から聖徳太子の思いや願いについて三角図を活用してグループで話し合い、聖徳太子がめざした国づくりについて文章でまとめる。

社会認識を深めるために
三角図を用いた。



三角図をもとに、聖徳太子が目指した国づくりについて文章でまとめる。

- ・争いが多かったり、天皇の命令にしたがわず熱心に仕事をしない人がいたりしたから、聖徳太子は仏教を広め平和な国や天皇中心の政治をめざしていたことが分かった。聖徳太子のおかげで今も平和な国が続いているのだなと思った。
- ・聖徳太子は争いが多い時代だったからこそ、冠位十二階を定め、天皇の命令にしたがい仕事を熱心にするよう十七条の憲法も定め、争いのない平和な国をつくらうとしたことが分かった。また、仏教の力でも争いをなくそうとした。仏教は、遣隋使達によって日本に伝えられ今も続いているんだな。

【成果】

- ・三角図は、具体的なものを抽象化していくのに使えることが分かった。三角図を作っていく過程が大事で、言語化していくことが思考を働かせるので大切な過程である。
- ・歴史的な事象を調べ「もっと知りたい。もっと関わりたい。」という思いが社会に関わる力の素地になる。児童のまとめの中には、今の自分や社会とつないで考えている内容も見られた。

【課題】

- ・三角図は、つくる過程が大事で、グループで話し合いをさせるなど、何回もいろいろな単元でやってみることが大切である。
- ・社会に関わる力を育てていくためには追究意識が高まり、その意識が継続されることが必要である。

2 討議内容

- ・シンプルですっきりした実践。三角図について4つの事象はどのようにして絞ったか。聖徳太子が目指したことをどのようにとらえさせたか。→教科書の年表に載っていた事象を4つ取り上げた。
- ・調べる時に家庭学習をどのようにさせたか。→ノートにまとめさせ、ひと目で分かる図を入れたり吹き出しを入れたりさせた。資料集から分かることをまとめて書かせた。
- ・三角図は、歴史の授業で他には使わなかったのか。→聖徳太子が終わった後、もう一回使った。状況に応じて、イメージマップやKJ法を使って指導するのもよいと思う。
- ・問題解決学習にどのように取り組めばよいか。歴史を学んでひとりの人物の業績を取り上げる。その時代の問題を解決するために聖徳太子がどのような考えをもって政治をしたのかを考えさせる。
- ・天皇中心の世の中というのをどのようにとらえているか。→天皇は、神様のような存在ではないか。

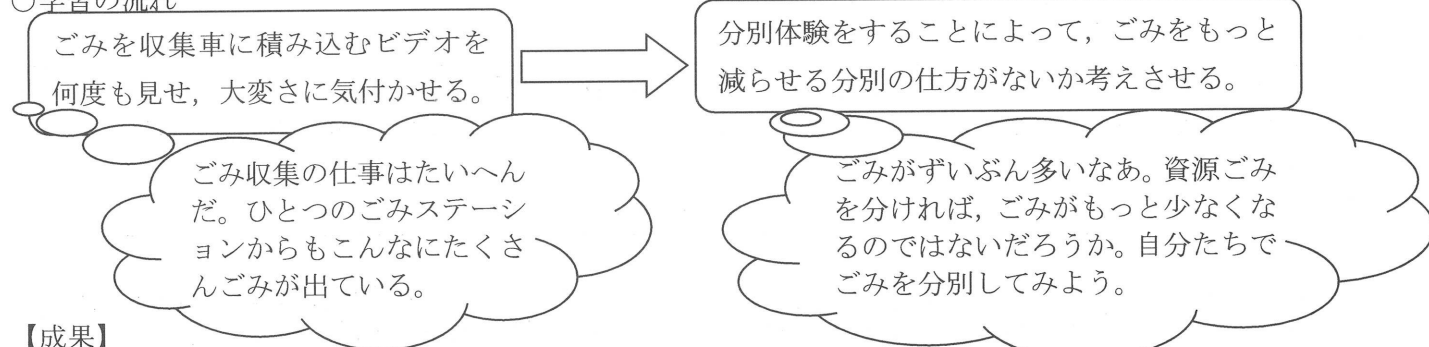
実践提案 さぬき市立長尾小学校 梅本明宏先生

第4学年 「ごみの処理と利用」

1 提案の主張

- ① 意欲をもって主体的に学習に取り組むために、直接体験の場を設定し、問いの連続を図る。
- ② ごみの分別体験を通して様々な機関が協力していることに気付くことで社会参画の基礎を養う。

○学習の流れ



【成果】

- ・ 直接体験を繰り返すことにより、実感を伴った問いが生まれ主体的に取り組むことができた。
- ・ 分別体験をすることで、再利用できるごみとできないごみを意識させることができた。
- ・ 分別体験しごみの行き先を話し合うことで、様々な人が関わっていることに気付く自分も取り組もうという考えをもつことができた。

【課題】

- ・ 児童が自ら問いを連続して持てるように、授業構築の段階で全体構想を綿密に立てる必要がある。
- ・ ごみの分別だけでは、ごみが各方面に分散しただけで減ってはいないので、3Rを基本にごみを増やさない認識を持たせるように仕組んでいく。
- ・ もえるごみ、資源ごみ、もえないごみの言葉の定義をしっかりとおさえる。
- ・ 事業所へ持っていくものは資源ごみになるということをきちんとおさえる。
- ・ ごみを出さない社会に関心を持たせる。

2 討議内容

- ・ 子どもたちにごみ調べをさせた時、ごみについての定義は教えたのか。
→何がごみかというのは、共通理解はしなかった。
- ・ 見学活動をもとに問いを生み出させる工夫がされていた。学習後の子どもたちの行動の変化は？
→牛乳の包みにプラと書いているのに気付いたり、牛乳の包みを回収する時にできるだけつぶしたりしようとしている。給食を残さず食べようという意識が出てきている。
- ・ ごみ収集車のビデオを繰り返して見せたところが良かった。視点を与えてじっくりと考えさせる。ごみの学習は面白いと思うが、何年か経って4年生を教えると、ごみの学習で教えることが変わっている。ルールに合った出し方、そのルールは何のためにあるのか。そういうことに気付かせることも大切。
- ・ 社会科って何をめざす教科だったのだろうか。リサイクル等についての態度育成（行動変容）が大切ではないかと思うが...社会科の魅力とは、何だろうか。

3 ご指導

- ・ 学習指導要領は、平成28年に新しいものが出た。目標が改訂され、調べるという活動は、考えるために行われる。
- ・ 個人が問いを出し合って、クラスの問題に発展していく。調べていることがはっきりしているから考えることもよく分かっていた。
- ・ 学習問題を作る段階が大切。調べ→考え→表現する 個々の問題をクラスの問題にどう広げていくか
- ・ 問題解決学習は、振り返る学習（何が解決できて何が解決できなかったのか）でなければならない。
- ・ 問いの持続は、振り返る学習をさせることによってできる。
- ・ 社会参画の3つの視点
 - 問い（気づき）をもつ。なぜ？（社会的なものの見方）
 - いろいろな立場に立って考えさせる。（多面的に見させる。）
 - ひとりでは解決できないので、学び合い・助け合いをする。

【編集後記】（香社研事務局）

今回の提案、討議では、社会科が本来大切にすべき「教材の本質」について深く考えさせられました。「ごみとは何なのか」「天皇中心の捉えは」…。これらの答えを明解にすることが、授業づくりのスタートかもしれません。ご提案された両社研の先生方、ご指導の大高先生、ありがとうございました。

香社研だより vol.3

発行者 香川県小学校社会科教育研究会

香川県小学校教育研究会社会科部会

会長 野村 一夫

発行日 平成 25年 9 月 27日 (土)

坂出・綾歌社研テーマ

「分かる喜びを実感できる社会科授業の展開」

～日常的な板書計画の活用を通して～

- ① 実践提案 宇多津町立宇多津小学校 河野富男先生
第5学年 「水産業の盛んな地域」(上村実践を通しての考察)

○提案の主張

- ・ 児童が「調べたい」「知りたい」と思うような体験や資料を準備し学習問題を設定することで、児童による主体的な活動が始まる。
- ・ 問題解決に必要な資料を精選、加工して提示することで、どの児童も自分の考えをもつことができる。
- ・ 児童の反応に合わせた構造的な板書計画を立てることで、思考力を十分に発揮できる。

○授業の流れ

(前時まで)

第1次「水産業について身近なものから調べ、単元を貫く学習問題を設定する。

第2次「日本の水産物がどのような方法で獲られているか、香川県高松市庵治町の漁師さんから学ぼう。」

第3次「水揚げされた水産物は、どのようにして消費者に届けられるか調べよう。」

第4次「水産業の現状を調べよう。」

◎ 200海里問題や後継者不足などの課題、漁業技術の向上や水産資源の保護や育成など従業者の新たな取り組みや工夫、努力を調べる。

○ 資料やインターネットなどを活用して、遠洋、沖合、沿岸の各漁法を調べる。

○ 漁業別生産量の変化のグラフから、200海里問題、漁場の変化を読み取る。

○ 香川県で獲れる主な水産物や香川県が行っている栽培漁業や養殖について調べる。

(本 時)

① サワラの漁獲量のグラフから、学習問題をとらえる。「減少していたサワラの漁獲量が、なぜ1998年以降増えてきたのだろうか。」

② サワラの漁獲量増加の理由を予想し発表する。

③ サワラの回遊範囲や漁獲量を増やすための取り組みの年表から、瀬戸内海に面している11府県が協力してサワラの資源回復を行っていることを考える。

④ 本時のまとめをする。

○実践の考察

(1) サワラを教材化する価値

- ・ 持続可能な社会を目指す人々の姿を見出すことができる。
- ・ 資源の壁に向かう人々の姿を捉えることができる。
- ・ 時間軸を広げて考えるのに適している。
- ・ 空間軸を広げて考えるのに適している。
- ・ 公的立場を広げて考えるのに適している。

(2) 香川県の漁法、栽培漁業、養殖漁業から学ぶ

- ・ 庵治の「小型底曳網漁法」「込網漁法」。
- ・ 東かがわ市のハマチの養殖。



○成果と課題

- ・ サワラが実は香川県において身近な魚であることを知った児童は、切実感をもって学習活動に取り組むことができた。
- ・ サワラの漁獲高回復について考える活動を通して、消防やごみ処理などの行政による取り組みと同じように、漁業においても他府県との協力が必要とされていることに気付くことができた。
- ・ サワラについて調べる活動を通して、魚も有限な資源であり管理していく必要があることに気付くことができた。
- ・ 板書計画を修正する過程で、本時児童に考えさせたい内容を焦点化することができた。
- ・ 「漁師の〇〇さん」して人物を取り上げることで、漁師さんの工夫や努力を具体的に捉えることができたのではないかと。
- ・ 板書計画に学習指導過程における発問、助言、支援を関連付けることで、教師にとって活用しやすいものになるのではないかと。

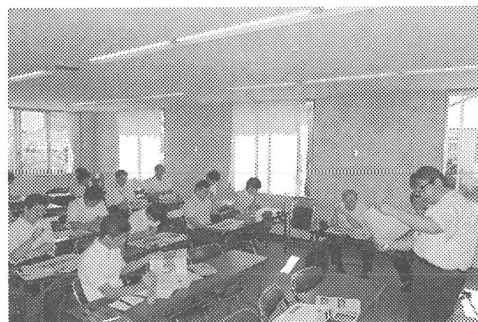
②討議

- ・ 東かがわ市のハマチ養殖を取り上げ、えさやり体験などを行った。鹿児島県のハマチ養殖と比較することで、冬場における海水温の違いを瀬戸内海、太平洋と関連付けて理解することができた。
- ・ 協力関係の広がりへの把握には、起点が必要。協力関係は漁師さんの生活とは裏腹な関係にある。禁漁することの大変さから工夫や努力を捉えることができる。
- ・ 優れた授業とは、児童が今までの授業を語ることができる授業である。単元のつながりが分かりにくい。本時主義になってはいないか。再構成ができたか。
- ・ 児童が単元全体を見通せることが必要。学習計画がないと、学習の連続性が自覚できず1時間毎に教師の発問、指示による授業になりがちである。主体的な学習には、一連の学習計画が必要である。
- ・ 「なるほど」という納得が、教師が資料を提示する授業からではなく、児童同士が見つめてきた資料を使って交流する中から得られる授業を目指したい。定例会について、全国大会を踏まえてどう伝えていくかどう焦点化していくかを検討していかなければならない。
- ・ 板書の精選されている。分かる喜びが実感できるような板書と児童のノート記述の関係について教えて欲しい。
- ・ 資料によって根拠づけができていた。資料が児童たちの手元があれば、予想の根拠となる。どの資料から自分が、友達が考えたかが分かる。
- ・ 他教科の教師は、単元計画では授業のイメージが湧かない。ノートとセットでまとめれば追試の時に助かる。教師主導型の一斉授業から児童主体の学習形態へと変えていかなければならない。板書も大きく変わってくる。児童の発表の際の、ICTについても考えていくべきである。

③指導Ⅰ（山内秀則先生）

○ 「サワラ」教材の追試

- ・ 一般化・日常化へのチャレンジはうれしい。児童の反応に学ぶ必要がある。
 - ・ 社会のどこを切り取るのかという課題がある。最新のもの、最先端のものにするべきである。
 - ・ 単元を貫く問いの後、学習問題の後で児童にマイクを向けるべきである。そこで、問題解決のための計画作りや、予想の手がかりを明らかにしたりする活動を設ける。
 - ・ 調べの前後の活動を充実するべきである。既習事項を集めると新しい知になる。学習問題に解決につながらなければならない。
 - ・ ESDの視点は、発展まで行かなければならない。葛藤場面が必要である。
- 板書
- ・ 思考のプロセスが見える板書でなければならない。結果のみでは、どう考えてそこに至ったかが見えない。
 - ・ 板書計画は、児童の反応を読むために行う。
 - ・ 「板書型指導案」というものもある。板書計画に活動、発問が付け足された形式である。
 - ・ 「矢印の板書」具体的事実から比較・類別を経て因果へ至る。間を埋めるような授業。



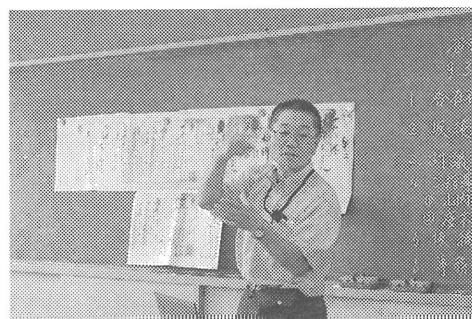
④指導Ⅱ（唐木裕志先生）

○ 授業、研究について

- ・ 単元構成に板書計画を組み入れてはどうか。
- ・ 研究史が大切である。
- ・ 児童の魚嫌いの実態。広告には骨なしの魚の写真しかない。児童の実態を考慮して、導入で魚の食味体験を設定する授業もある。保護者の理解は必要である。
- ・ 教師が教材研究後、資料を教室のどこかへ置いておき児童が自由に見られるようにする。深まり、発見のある授業を目指してほしい。

○ さかな？魚？肴？（歴史に見る魚）

- ・ 魚の読みは元々「うお」だった。さかなの本来の字は肴。肉食がなかったから、その中心はうおだった。だから、魚の読みが「さなか」になった。
- ・ 高松藩の殿様が川津高木家の梅の木見物をした際の献立の古文書。
- ・ 幕末新暦3月、坂出魚問屋米屋市蔵の永代帳。高松の魚問屋からサワラの真子をどれくらい所望していたが分かる資料。



【編集後記】（香社研事務局）

昨年度から漁業の単元の継続研究です。山内先生の実践をベースにして、それぞれの先生方が自分なりの個性を注入しながら実践研究を積む姿勢に共感を覚えました。山内先生からは、自分の実践が進化して行っていることへの感謝が唐木先生からは古文書に潜む教材の見方など、新たな発見が多い研修でした。

香社研だより vol.4

発行者 香川県小学校社会科教育研究会

香川県小学校教育研究会社会科部会

会 長 野 村 一 夫

発行日 平成 25年 10 月25日 (土)

三観社研テーマ

個が育ち、生きる社会科学学習の創造

～考える力を育てる社会科学学習をめざして～

- ① 実践提案 観音寺市立観音寺小学校 古子貴将先生
第5学年 「米づくりのさかんな庄内平野～何とかせないかんやろ！香川県の米づくり～」

○提案の主張

香川の気候と農業が見える米「おいでまい」の教材化

○授業の流れ

従来、この単元では、庄内平野の米作りの様子を通して、日本の農業について学んでいく。米作りの先進地である、庄内平野を学ぶことを意欲化させる方法について提案したい。本実践で、子どもの意欲化を図るために扱ったのが、香川県の農業の問題点である。この問題点を提示することで、子どもたちの中から「どうにかしないとイケない」という気持ちを引き出して、調べの必然性を高めていきたいと考えた。単元構成の概要は以下のとおりである。

第1次 単元を通す課題の設定

1 時間目：香川の米作りの問題点を知る。

香川県が現在抱えている問題を知ること、子どもたちの情動を揺さぶる。

2 時間目：解決の方法を先進地から学ぶ。

問題を解決するための予想を行い、実際の農業の様子について学習の計画を立てる。

調べていく課題

第2次 調べる時間

3～7 時間目：香川の農業を良くする方法を探るため、先進地を調べる。

教科書を使って、全国を代表する農業の先進地、庄内平野の仕事の様子を調べていく。

第3次 考える時間

8～10 時間目：調べたことをもとに、香川県ではどのようなことができるか考えていく。

庄内平野で行っている農業の様子から、香川県でできる取り組みを考えていく。

第4次 まとめの時間

11 時間目：学んできたことを表現する。

香川県の米作りのこれからについて考えて、表現する。

(本 時)

1 前時の学習を振り返る。

- ・ 香川県では、10年以上前から品種改良に取り組んでいる。

2 おいでまいのことで知り、学習問題を作る。

- ・ 香川で品種改良された。・徳島県のあわみのりと福岡県のほほえみを掛け合わせている。

農場試験場の三木さんはどんなお米を目指したのだろう？

(1) 学習問題対して、自分の考えを持つ。(予想)

- ・ お米に必要なのはおいしさだ。美味しいお米の品種をかけあわせたとはいえない。

(2) 友達の意見を聞いて、自分の考えを深める。(予想の吟味)

- たくさん収穫できること・味が美味しいお米・病気に強いこと・稲が倒れないこと・気候の変化に強い品種。

(3) 検証する

- ・ 香川の気温が年々上がっている。香川県が抱えていたのは高温障害による品質低下だったんだ。それを改善したんだね。

4 本時のまとめをする。

- ・ 香川県の米の品種改良のポイントは、それぞれの土地の気候に合わせた米づくりを行うことが大切である。

○実践の考察

(1) おいでまいを教材化する価値

- ・ 現在、香川県の農業が抱えている問題点から課題解決的な学習が展開できる。
- ・ 米作りの先進地を学ぶ必然性が生まれる。
- ・ 今後の展開によって、さらなる授業展開が期待できる。

(2) 香川の米作りの問題を解決しようとする人の立場の広がり。

- ・ 農業に携わる「行政」「農協」「農家の人」それぞれの立場で問題解決を図っている。
- ・ 他県との比較が行いやすい。

○成果と課題

【成果】：調べの必然性を高める身近な「問題点」！

子どもたちにとって、「田植え」や「稲刈り」といった農作業は非常に縁遠いものになっている。そこへ、庄内平野という知らない土地の事例を取り上げてもなかなか意欲化は図りにくい。今回の実践では自分たちの香川県の大きな課題である「一等米比率が全国で46位」という、大きな驚きを伴う問題点を提示することで、大きく情動を揺さぶることができた。この気持ちの揺れは、調べや思考をさせる時に大きなエネルギーとなって子どもたちの学習を支えていた。単元の計画を立てるときに、子どもから近いところの「問題点」を取り上げることは一つの手法として大きな効果があると実感している。

【課題】：気候と米作りの関係が見えた授業になっていたか？

今回は、「おいでまい」を扱って気候と米作りの関係性を学んでいった。この実践を通して、1点課題が見つかった。それは、米作りと気候との関係の一般化である。今回の授業では、「おいでまい」は「香川県の気候」の問題点を克服するためにできたものだという学びに至った。つまり、香川県の一事例として気候と米作りを学んだのである。もっと広く、どの地域でも気候に合わせて米作りが行われているということを学ばなければ、気候と米作りの関係性を一般化して学ぶことができないというのが、今回の課題である。

② 討議

- ・ 香川県農業の抱える問題点に迫るための教材としての「おいでまい」の価値は非常に理解できた。
- ・ 授業の入り口と出口を子どもたちにとって明確にする。この単元は日本で始まり日本で終わるようにする。
- ・ 日本の食料生産の概要を見せることで、ダイナミックな展開が期待できる。
- ・ 行政の取り組みとともに、農業に従事する人を扱うことで自然条件を見せていく。
- ・ 農業や食糧問題になっていくのは、高齢化による人手不足が大きい。この問題を取り扱っていくことも大切である。

③指導Ⅰ（小西寛先生）

○ 教材研究の在り方

- ・ 足で稼いだ教材だった目、授業者の問題意識の高さが非常に伝わってきた。
- ・ ピンチを扱うことで、子どもの情動を揺さぶる単元構成になっている。
- ・ 授業の具体では、「品種改良」をすることの意味を深く考えていかなければ本質へは行き着かない。
- ・ 我が国の農業を見据えた単元構成にするために、時間を広げて人々の努力を見せることや空間を広げて我が国の食料がどのように確保されているかを単元の中に位置づけていることが今後の課題と言える。

【編集後記】（香社研事務局）

新採2年目のフレッシュな先生の香川で売り出し中の「おいでまい」を教材にした実践発表でした。実際に栽培している農家への取材など、自分の足で稼いだ教材を基にした実践でした。小西先生からは5年の単元として考えるべきことをご示唆いただきました。前田先生からは昔の道具について教えていただきました。

香小研夏季研修会 全体講演記録

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

澤井 陽介 先生

演題「社会科の授業づくりの総点検」

【あいさつ】

準備・運営が大変だろう所には頭が下がる思いがするが、香川県は若い先生や女性の先生が活躍されているところが、他県にはないことで楽しそうに見える。香川県の社会科部会を見ていると、これからの社会科全体が変わりそうな気がする。

【過去の指導要領より】

過去、戦後からの指導要領を見直してわかるのは、内容構成は今にも通じるものがあるということ。昭和 33 年に道徳と切り離され、今に近いものになっていく。昭和 43 年版から「はいまわる」という指摘からより精選されていく。その後生活科や総合的な学習の時間が新設され、現在の形になっている。いまでは、昔からある社会機能に、国土・歴史も合わさって、社会生活とされている。「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の育成」という文言が公民的資質の基礎を養うために加えられた。「調べる」学習に傾斜がかかっていた過去もあったが、もう一度「問題解決」が強調されだしている。

【頭に入れておくべき、単元構造 2 種】

単元構造には 2 種あって、「子どもの問題解決を重視する型」、「内容理解を重視する型」がある。どちらかに偏りがちになるが、言えるのは、どちらも大切だということ。教師主導の授業ではなく、内容を抑えたら、問題解決の授業も必要になってくる。多忙な小学校教員は、この 2 種の考え方を頭に入れておくだけでも、違ってくる。

【予想や、ふりかえりを大切に】

学習問題は、子どもたち自身のものでなければならない。生活経験や、既習事項から、子どもはいい予想を出してくる。子どもに予想させるかどうかは、その後の学習に大きな影響を及ぼす。まとめた後に、ふりかえりの時間があるかどうか。ここで学習問題や予想に返っていけることになる。45 分の中で、予想やふりかえりの時間を確保するのは難しい場合もあるが、せめて単元の中では行うなど軽重をつけて必ず大切にしていけるべきことである。

【授業づくりの要（1）学習問題の吟味（2）教材研究】

（1）学習問題の吟味について

学習上の問題と社会の問題というのは、切り離して考えるべき。前者の解決も思いのほか大切。「教材の理解」から、「教材を通して内容を理解する」までもっていかなければならない。

「なぜ～」→「何を調べたら、なぜは解決するか」（「どのように）を使ったほうが、安定した学習問題になる場合も多い。）「なぜ」の疑問があると、自然と予想が出てくる。学習問題は必ず子どもが考えなければならないわけではないが、疑問があると、みんなで考えることができる。他にも時

間経過で学習問題をつくることもできる。 ex「なぜ変わらないで続いているか？」

（２）教材研究について

教科書だけでは、学習の深まりは難しい。本当に意味のある、価値のある内容をこそ深めていかなければならない。そのためには教材研究が欠かせない。教師がここぞと思うところに焦点化させていかなければならない。いい教材研究をするためには、「教材化の視点」をもつべきである。（ex 消費者視点？購買意欲？社会のニーズ？地域とのつながり？）ここを整理すると、なんでもかんでも「参画」ではなく、どういう社会認識を育むかというところにも行きついていく。「入り口」と「出口」は、社会科でよく言われるが、「中」も大切。「中」とはつまり、社会事象の意味の理解。そこをおろそかにしてはならない。

【社会認識・参画を整理すると】

社会認識は「自分たちの生活とのかかわり」「人々の工夫や努力、願い」「よさや課題」。社会参画の意識は「自分たちにできること」「関心をもち続けること」「社会全体ですべきこと」だと思う。

【授業では、「見える化」が大切。】

写真・グラフ・読み取ったことの板書などビジュアルで子どもに訴えていく。子ども一人の気付きをみんなでつないでいく、事実を丁寧に読み取っていくというクラスはよい。気付き・思考が見える板書、子どもと教師で作っていく板書を。実物やハンドメイドというのもインパクトのある見える化になる。ICTの活用や、ノート指導ももちろん見える化の観点から大切。

【話し合い】

授業をバージョンアップさせるには、やはり話し合い。教師の具体的な助言例として、「どうしてそう考えたの？」「どんな資料からそういえるの？」「たとえばそれはどんなこと？」「つまりそれはどんな役割かな？」などがある。

【学習評価】

子どもの表現を評価する技術を高める。そのポイントは、「子どもの反応を想定する」「指導したことを評価する」「思考・判断・表現は、‘思考→理解’‘理解→思考’の過程をみる。」「関心・意欲・態度は、多様な答えのある学習場面でみる。」

当日の実践発表から、多くの香川県の先生方の実践も織り交ぜながら、熱いご講演をいただいた。28年度の全国大会につながる、実り多いご講演であった。

記録：高松市立鶴尾小学校
教諭 坪井 孝明 先生

「香社研研究フォーラム」報告

一年の各郡市の実践を交流するまとめの会を、本年度も昨年同様、香社研「研究フォーラム」と位置づけて実施しました。

開会式後のデモンストレーション（一人1分間）で、実践の概要を全体に説明し、参会者が関心のある実践を選んで聞くパネル発表という形で進めました。その実践を、

○ 研究を広めることに貢献した実践・・・金カップ

※ 参会者がまねしたい実践に鉛筆を投票して決定。

○ 研究を深めることに貢献した実践・・・銀カップ

※ 講評の新見治先生（香川大学教育学部教授）が選出。

という二種類のカップに分けて、実践者に贈呈しました。

また、研究部から平成28年度全国大会に向けて研究の方向を提案しました。

休日にもかかわらず、100名以上のご参会をいただき、盛会裏に終えることができました。

1 目的

- 参会者各々が共感できる実践に投票し、最も得票数の多い実践をグランプリとし、ゴールドカップを実践提案者所属の郡市社研に授与することを通して、次世代を担う若手のがんばりを賞賛し、研究を広める場とする。
- 深い教材研究や理論を背景にプロの技が光る先見性・提案性の高い実践を、講師の先生に選考していただき、シルバーカップを、実践発表を行った郡市社研に授与することを通して、研究を深める場とする。
- 各郡市の今年度の実践を交流したり、講評をいただいたりして、研究を深化し、来年度の研究の方向性を探る。
- 香社研の研究を広く他教科の先生方にも広める。

2 日時 平成27年2月21日（土）13:00～17:00

3 場所 香川大学教育学部附属高松小学校 第一体育館

4 日程

◆ 開会 13:00～13:20

- 1 副会長挨拶（内山 宗治 校長先生）
- 2 カップ返還
- 3 フォーラムカップの進め方
- 4 デモンストレーション

それぞれの郡市で、実物を出したり、キーワードで好奇心を揺さぶったり、概要をかいつまんで説明したりと、趣向をこらした説明がありました。数名で協力してパフォーマンスを考えていた郡市もあり、聞いていてわくわくするようなデモンストレーションになりました。

◆ 実践交流（パネル発表） 13:40～15:15

<第3学年実践>

「農家の仕事」高木浩彰先生（高松市立国分寺南部小学校）

<第4学年実践>

「ホテルを守る まちづくり」竹森仁志先生（琴平町立琴平小学校）

「ごみのしまつ」原井和彦先生（東かがわ市立白鳥小学校）

<第5学年実践>

「情報化した社会とわたしたちの生活」白川麻里先生（小豆島町立苗羽小学校）

「自然災害を防ぐ」櫻井道芳先生（丸亀市立郡家小学校）

「自然災害を防ぐ」岡田健先生（観音寺市立豊浜小学校）

<第6学年実践>

「明治維新をつくった人々」藤井隆法先生（坂出市立松山小学校）

◆ 研究部提案「H28年度全国大会に向けての研究の方向」 15:20～15:35

香川大学教育学部附属高松小学校

教頭 大嶋 和彦

◆ 講評 15:45～16:45 香川大学教育学部 教授 新見 治 先生

◆ 閉会 16:45～17:00

- 1 表彰 金賞・・・高松 銀賞・・・丸亀
- 2 挨拶（講評のお礼含む） 野村 一夫 校長先生

5 成果と課題

県の研究の方向が見え、各郡市の研究も提案性のある実践紹介が多かった。特に教材の価値や今後の可能性を香川大学の新見先生が具体的に話して下さった。

今回のフォーラムでは、実践発表とは別に質疑や意見交換等を行う交流の時間を設定した。それによって、直接提案者や協力者に、聞き手の生の声を届けることができた。具体物を見ながらの交流になり、自郡市だけでなく、他郡市からの声を汲み取ることで、各郡市の今後の研究の一助になると考えられる。

次年度に向けての課題は、大きく二点ある。一点目は昨年度からの課題である、公平性が保たれたかということ、二点目は提案者同士の交流をする場がもちにくいということである。今年は7グループによる実践発表で、3・2・2というグループ数で分けた。しかし、それらの発表を参会者が均等に見ることは難しいことである。

そこで、例年通りに8グループの実践発表を確保することができれば、提案者同士のパネルディスカッションの形式をとることを検討したい。それによって、郡市の考えの違いを参会者が見取ることができ、参会者は全ての実践を公平に見ることができるようになるため、投票における公平性も保たれるようになるのではないだろうか考える。

